

母の手袋

奈良県 鹿ノ台中学校 2年 黒崎 理子

「手袋がないんだけど、知らない？」

ある冬の朝、玄関から母が叫んだ。台所で朝食のパンの用意をしていた私は、一瞬手を止めて、

「知らない。」

と叫び返した。パンが焼きあがっても、玄関で物音が続いていた。(見つからないのかな。)

「ぜんぜん手袋が見つからない。犬の散歩が遅くなるからもう行くね。昨日の散歩の途中で落としたのかもしれないから、同じ道を行きながら探してくるわ。」

母がまた叫んだ。

去年のクリスマスに、母は手袋をプレゼントにもらった。毎朝、母は犬の散歩に行ってくれる。寒くなるとリードを持つ手が冷たくなるので、手袋は必需品だ。

母の手袋はグレーの毛糸で編まれたもので、手首のまわりに白のモコモコした飾りがついていて、風が入りにくくなっている。

「温かいけど、ちょっとぶ厚くて、ポケットに入れておくとすぐに落ちちゃうのよね。」そんなことを母は言っていた。

(見つかるといいけど。)

母は、とても物を大切に使う。前に妹が公園でボールをなくしたことがあった。外が暗くなり、妹は探すのをあきらめて帰ってきた。それを聞いた母は、「もう一回、探しに行こう」と、妹と公園に戻った。帰ってきたときには妹の手にボールがあった。

「物は大切にしないとね。簡単にあきらめたらあかん。大切に思う強い気持ちがあれば、たいていの物は見つかるよ。私もいろいろな物を置き忘れてきたけど、たいてい手元に戻ってくるもの。」

そう言って、母は笑った。

ガチャ。玄関の扉が開く音がした。

「あったよー。私の手袋。垣根の下のすきまに、霜がかからないように置いてあった。」嬉しそうな母の声が家に響いた。

母は昨日の散歩コースをゆっくり歩いて、あちこちを見て探したそうだ。すると落とし物がそっと置いてあるのをいくつか見つけたそうだ。手袋、ハンカチ、帽子。木の枝にかけてあったり、見つけやすいように塀の上に置いてあったり。

朝のできごとを思い出しながらの学校の帰り道。ふと周りを見渡すと、ある家の植木に手袋が片方かけてあるのを見つけた。

(お母さんみたいな人がいるんだな。)

この家の人か誰かが拾って、落とし主にわかるようにかけてあるのだろう。雨や霜にぬれたりしないように気遣う気持ちが表れていて、心があたたかくなった。ちょっとした親切が人と人をつないでいる気がした。